

# 論 文 要 旨

2022 年 8 月 21 日

※報告番号	第 号	氏 名	大野（村松） 香織
主論文題名			
舞踊ポーズと人が感じる印象の認知評価構造の解明とそれを用いた指導法への応用			
内容の要旨			
<p>本論文は、鑑賞者の視点からとらえた舞踊研究である。従来の舞踊に関する研究は、文学的、芸術的視点が中心であった。20 世紀初頭、R. ラバンによって舞踊の科学的研究が開始され、また 20 世紀後半には教育や医科学的見地からの研究が盛んになった。1990 年代にはモーションキャプチャ等の利用により、情報・工学系との応用的研究が活性化し科学的な視点の研究は増加した。その一方でこれらの研究のほとんどは、動作の解析や記号化に焦点が当てられていた。つまり、身体表現を行うダンサー（運動の実施者）に注目した研究であった。その後現在に至るまで、ダンサーの運動に注目した研究が主流となった。他方、舞踊の印象評価を行う鑑賞者（イメージの受信者）視点の科学的研究は、顕著とは言い難い状況が続いた。そのために舞踊の要所となる「イメージと身体表現」の関係は、長年の課題となっていた。理由の一つには、従来の舞踊分野の研究手法では、課題の解析が難しかったことが挙げられる。</p> <p>本研究では、21 世紀前後から発展が著しい感性工学手法に注目した。中でもラフ集合理論に注目し、課題となる「イメージと身体表現」の関係を捉えようと考えた。本研究ではこの関係を検証する為に、クラシックバレエ（バレエ）の上級者（プロ鑑賞者）の視点から認知評価構造を捉えることを目的とした。ダンスには多くのスタイルが存在するが、その中でも身体の分節化と体系化が進んでいるバレエは、感性工学手法と親和性が高いと考え分析対象とした。さらに得られた知識を、舞踊教育の指導へ活かすべく提案を行い、社会的コミュニケーションへ役立てることを目指した。</p> <p>まず「イメージと身体表現」の関係を捉えるための基礎研究として、「舞踊ポーズを用いた上級者の認知評価構造の分析」を行った。舞踊ポーズの構成方法の開発、すなわち「創る」知識を得ることを目標とし、そのためにバレエ上級者の見方を検証した。最初に、印象評価（イメージ）とポーズの身体認知要素の関係分析を行った。20 対の形容詞対のイメージに対し、ラフ集合分析の決定ルール分析法を用い、イメージに基づくポーズを構成するための特徴的な身体認知要素の組み合わせパターンを得た。例えば、「動的な」イメージでは「脚を高く挙上」する要素、「静的な」イメージでは「両手を近づけて」「身体を長細くする」要素や、「身体形状の広がり抑制する」要素が抽出された。これらは舞踊ポーズの構成に関する基礎的な知識となり得ると考えられる。</p> <p>次に、舞踊ポーズを用いた振付構成の開発を目標として、イメージ群と身体認知要素の関係分析を行った。主成分分析とラフ集合分析を用いて解析し、新たな知識が得られた。</p>			

心情性イメージ群は、四肢の広がりを構成する身体認知要素に関連していた。形態性イメージ群は、全身的形状を構成する身体認知要素に関連していた。審美性イメージ群は、全身的形状の構成、また動作の誇張に関わる身体認知要素と関連していた。3つのイメージ群と、それらを表現する身体認知要素の関係は、ポーズの振付構成の基礎的な知識になり得ると考えられる。

続いて「未経験者と上級者の認知評価構造の比較分析」を行った。舞踊ポーズの指導方法の開発、すなわち「鑑賞する（見る）」知識を得るために、上級者の見方を、未経験者の見方と比較した。ラフ集合分析で抽出されるコラムスコアを指標として、両者の認知評価構造上の差を比較分析した。初心者向けの指導方法へ関連する知識は、次の通りであった。

上級者-未経験者間の比較では、属性レベルで一致や不一致が確認された。上級者-未経験者間で認知評価の相関が高いイメージ群では、両者の認知評価が一致した。認知評価の相関が低いイメージ群は、身体感覚に関わる属性において、不一致が顕著であった。また、コラムスコアの出現パターンから、両者の不一致パターンの種類は2つ示された。一つ目のパターンでは、異なる属性値に対し両者は同一のイメージ評価を示した。2つ目のパターンでは、同一属性値に対し両者は異なるイメージ評価を示した。これらは、科学的エビデンスに基づいた鑑賞（見かた）の知識に関連すると考えられる。

本研究で得られた知識を、舞踊教育上の指導を通して社会的コミュニケーションへ応用した。これらの提案では「イメージにふさわしい身体表現の構成や振付」という理念が通底している。認知評価構造に基づく基礎的な知識は、科学的視点から舞踊教育の現場へ与える新たな視点として、今後の応用の可能性が考えられる。